

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華経 (一)

若 杉 見 龍

一

本年(昭和五十七年)四月十三日、日中両国の僧俗により鳩摩羅什三蔵の木像開眼(光)法要が羅什の廟所のある終南山圭峰の北麓の草堂古寺において営まれ、日本側からは金子日威全日仏会長を導師として、僧俗五十数名が出坐し、法要は誠に厳肅且つ盛大裡に挙行された。これらに関連した事柄は細大漏さず全て昭和五十七年六月一日号の日蓮宗新聞等に報道されているので、この事についてはこれ以上は記さないが、その際奉安された羅什像の原画は『仏祖道影』によるものであり、この『仏祖道影』とその原画の由来については何ら触れていないので、後日のため、以下筆者の理解した範囲を記し、後賢の補訂を俟ちたいと祈念する次第である。

羅什像彫刻に際し、使用した『仏祖道影』は正しくは『増訂仏祖道影』と称するものであり、この書籍の編集された事情は編集者の鼓山湧泉寺主である虚雲法師の造る「序」に詳しい。原文は筆者の力不足によるためか、少々理解し難い所もあるが、「序」の大意を次に掲げてみよう。

(一) 内は筆者による簡単な註であり、「一」内は文意を達するため、筆者が補欠した説明である。また固有名詞については、最近出版された『中国仏教史辞典』(鎌田茂雄編・東京堂出版・昭和五十六年九月刊)に記載されてい

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華経(一)(若杉)

るものは、同書の頁数のみ指摘したが、その他については判明した限り、補注において説明した。

二

『増訂仏祖道影』「序」

清の光緒庚辰(一八八〇・明治十三年)の年に蘇州(江蘇省)瑯瑤^{ろうぎょう}經房が『仏祖道影』という本を印刷・刊行しました。この本は守一大師^{しういちだうし}が編集したもので、これは守一大師自ら真寂本・雲福本とよばれる二部の『仏祖道影』を編集して一部にしたもので、四巻本であります。これには祖師の絵像二百四十尊が掲げられてあります。そしてこの『仏祖道影』の「序」文によれば、守一大師は次のように同書の縁起を書いておられます。

私は最初に雲福本(未詳)といわれる『仏祖道影』を手に入れました。この雲福本は宗門(禪宗)の正しい法脈を伝えた人々の肖像画を初めの方に掲げ、そうでない人々のは終の方に掲げてあります。その後ずっとたつてから、真寂本(未詳)を楊仁山居士から手に入れました。楊仁山居士はこれを心月上人(伝未詳)から手に入れたと言っています。又統藏^{ゆうそう}(中国編集の大藏經の統統篇)には憨山大師^{かんさんだうし}の作った八十八祖の伝記と贊が記載されています。その文は「紫柏老人^{しやくはくらうじん}が丁雲鵬^{ていゆんぱう}に委嘱した絵像によせて題す」というものであります。雲福本と真寂本は牛首山^{ごうしゅざん}に所藏されていた画像を臨写して、発行したもので、『道影』の最初とするものであります。現在になつてみると、牛首山にあった丁雲鵬の画像みの伝世して(あるいは丁雲鵬の画像の臨写像のみ世に伝わっているという意味か?)いる次第であり、真寂本も雲福本もその初刊本は仲々容易に手に入りません。「だから私・守一が両書を訂合して

一部として発行します。」

と書いております。

「以上、文章が簡単すぎて、文意が捕えにくいと思われるので、『諸祖道影』の発起人である紫柏禪師の述べていることを要約してみよう。『紫柏尊者全集』卷十三⁽⁸⁾によると、

紫柏は「洪武年間（一三六八—一三九八）縉素の好道者が大迦葉以下中国の耆宿百二十尊を絵師に描いてもらった。それは大変立派なものであったが、南京の南の牛首山に所蔵された。立派なものとはいえ、何分にも歳月を経て、紙も古くなり、色もあせてきたので、絵師に頼んで、十部を臨写し、十方に散布した。」と言っている。一方、慈山大師は『慈山大師夢遊全集』卷三二「題諸祖道影後⁽⁹⁾」で

宮廷（明朝）に「歴代諸疏道影」があるが、偶然にもその内稿本の八十八尊を手に入れた紫柏禪師は、現在有名な画家である丁雲鵬に依頼して、同じものを四部描いてもらった。そして、西方の蜀の峨眉（嶺）山、金陵祖堂山幽棲寺、匡山（廬山）五乳峰法雲寺、南嶽山にそれぞれ一部ずつ奉納した。

という。また慈山大師は同全集卷三五に

「諸祖道影略伝賛」四十八首及びその他の師の賛を多数記載しているのである。

これによると、慈山大師が原画が宮廷にあったというのは何かの訛伝で、洪武年間、牛首山に納めた絵が古くなったので、紫柏禪師が丁雲鵬に依頼して、複製十部を作り、十方の寺に奉納したというのが真相に近いものであろうし、「十方の寺」と紫柏禪師が言っている中には、慈山大師のいう「四ヶ処」が含まれていたに相違ないであろう。紫

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經（若杉）

柏大師の造った『方冊大藏經』に慈山大師が序文を書いたり、慈山大師から紫柏大師にあてた書簡文が残っている程、両師には親交があった。両師の事蹟が明瞭でないので、断言はできないが、慈山大師が盧山五乳峰法雲寺にいたので、前記の道影が、盧山に奉納され、慈山大師はその奉納された道影を見て、略伝と賛を作ったと筆者は愚考する。

この道影と略伝・賛を併せたのは誰か判明しないが、真寂本・雲福本の何れも絵と略伝と賛を併せもったものであることが推察される。また次の文に鼓山にも列祖の道影があったと伝えているが、鼓山湧泉寺は明代以降、福建省のみならず、中国有数の寺院であったから、紫柏禪師はこの鼓山にも奉納したことと思われる」。

処で、私・虚雲の住職しております鼓山湧泉寺はもと列祖の道影を所蔵しておりました。これは永覚老人が住職した時であるといわれております。釈迦牟尼仏、迦葉尊者を始めとして、大体百三十尊ほどの画像であり、一枚一枚に賛がつけられておりました。その後、永覚老人は転住して杭州(浙江省)の真寂院にいましたが、崇禎戊寅(一六三八)の年、この仏祖の道影を印刷・刊行しました。これが真寂本といわれるものであります。その後、二十四年たつた康熙壬寅(一六六二)の年、永覚老師の嗣法、為霖道霈大師が、泉州(福建省)の開元寺で、真寂本の原画を見つけました。しかし、僅か八十餘尊しかありませんでしたから、更に捜し求めた所、四十七尊を見つけ、前の一緒に遷りましたが、幸いにも、諸天・龍神のご守護により、僅か五尊が紛失したのみで、百十七尊は完全無傷で残っております。私はこの絵と蘇州で刊行された守一大師の『仏祖道影』とを比較して見ましたが、同じものは百八尊で伝と賛はみな、永覚老人の書いたものと同じでした。私は坐禪・誦經の暇を見ては、あちらこちらと更に道影を求め歩き、更に若干尊を得ました。その尊像には伝・賛のあるものも沢山ありましたが、ないものもありました。伝・賛の

ない画像には僭越ながら私が補って付け加えました。蘇州本の並べ方は大体年代順であります。そうではない所もありましたので、私がすべて年代順に並べかえ、私の集めた尊像も編入した次第であります。蘇州本と私の集めた尊像を合計すると三百四尊となります。その尊像画を版木に刻み、印刷しました。皆様とご一緒に諸尊にご供養致し、成仏の勝因を植えたいと存ずる次第であります。こういう訳で、この本の題名を『増訂仏祖道影』とつけました。これは守一大師の原本により、私が増訂したという意味であります。康熙帝（一六六二—一七二二）雍正帝（一七二三—一七三五）の頃から諸山の各師が道影を集めました。すべてに及んでいないのは、時間と能力に限りがあるからであります。更に不足分を補い、拾い集めて、後世に残すのは他日を期したいと思えます。

昔、釈尊が涅槃に入られたので、阿難尊者は經典を靈鷲山において結集し、弥勒菩薩は遠い未来に出世せられるといい、又迦葉尊者は衣を持って、鷄足山で仏の再来を待つておられるといわれています。智慧の命・慈悲の灯はすべて後世の人々の続いてくれるのを待つ許りであります。私は末法に生れ、仏道を求めましたが、まだまだ仏道を得たとはいえませんし、仏の大法が将来くずれ落ち、善根が日々に薄くなって行くのを歎き、懼れています。仏法が末永く続き、未来を昭かに示すことを願っております。

私の本書出版の意図は上は紫柏老師・憨山大師・永覺老師・為霖大師が道影を残されたご意志を引き継ぎ、以つて仏恩の万分の一に報ずるのみであります。

と記述し、最後に「仏歴二千九百六十二年乙亥（一九三五）仏誕日」と記述の年号を記して結んでいる。

三

以上の虚雲の「序」を要約してみると、道影の起原というべきは十四世紀の洪武年間に描かれたという牛首山所蔵の道影に求められ、更にはその一部の原画を紫柏が丁雲鵬に複写せしめ、前記の峨眉山、祖堂山、廬山、南岳等の十箇寺に一部ずつ奉納したが、その奉納した寺の中には鼓山湧泉寺もあつたようであり、湧泉寺から杭州真寂院、泉州開元寺を経由して、もとの湧泉寺に返り、それらが「増訂仏祖道影」の中心部をなしているように見受けられる。随つて、『仏祖道影』の原画は古くは十四世紀にまでさかのぼることが可能である。しかし、この書に記載されているからと言っても、羅什画の起原が十四世紀であるとは残念ながら断定することはできない。それは紫柏当時は百二十幅であると伝え、現行本は虚雲等の蒐収した分を併せて三百四幅となっているからである。又大変に消極的な理由ではあるが、慈山大師の『八十八祖道影伝贊』⁽¹⁸⁾には羅什の略伝や贊が記載されていないことも挙げられる。

次に『増訂仏祖道影』に収載されている鳩摩羅什像と略伝・贊を掲げる。略伝と贊については筆者の国訳を参考までに付したい。

なお、草堂古寺に奉納された法華経は日蓮聖人ご所持の『注法華経』(現・玉沢妙法華寺蔵)の複製である。この法華経を同寺に奉納し、羅什像の前に安置した理由を述べたいと思うが、与えられた紙数に制限があるので、これについては次稿を期している。

四

姚秦羅什尊者



西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經(一)(若杉)

師天竺人生於龜茲幼出家日記三萬二千言同母
入寺頂佛鉢心自念言鉢形甚大何其輕耶卽重不
可勝失聲下之乃悟曰心有分別故鉢有輕重耳時
沙勒王請陞座講經學者尊之師道振西域名流東
土姚秦遺隴西公碩德迎師至長安待以師禮甚見
優寵乃請譯衆經暢顯神源揮發幽致于時四方英
賢萬里必集罔不思諮稟于座下蓋佛法東來至師
始著及沒茶毘舌根不壞蓋表所說之不謬云贊曰
靈發母胎妙慧若神持鉢悟旨幼齡說經佛法東
傳訛謬相承實藉師至放大光明

〔国訳〕

師ハ天竺ノ人、亀妓ニ生ル。幼クシテ出家シ、日ニ三万二千言（梵語は三十二の母音を一行とし、千行をいう）ヲ記（憶）ス。母ト同ジク寺ニ入り、仏鉢ヲ頂キ、自ラ念言スラク「鉢ノ形甚ダ大ナルニ、何ゾ其レ輕キヤ。」ト。即チ重キコト勝ウ可カラズ、声ヲ失シテ之ヲ下シテ乃チ悟リテ曰ク「心ニ分別アルガ故ニ、（仏は感応して）鉢ニ輕重アルノミ。」ト。時ニ沙勒（カシユガル）王、座ニ陞リテ、經ヲ講ゼンコトヲ請ウ。学者之ヲ尊ビ、師ノ道ハ西域ニ振ウ。名ハ東土ニ流レ、姚秦（王・興）ハ隴西公（姚碩德）ヲ遣シ、碩德ハ師ヲ迎エテ長安ニ至ルニ、（姚興）ハ待（遇）スルニ（国）師ノ礼ヲ以ッテス。甚ダ優寵セラレ、乃チ衆經ヲ訳センコトヲ請ウ。（訳は）暢顯神源ニシテ幽致ヲ揮発ス。時ニ四方ノ英賢ハ万里ヨリ必ズ集リ、思諮ヲ座下ニ稟ケザルハナシ。蓋シ仏法東ノカタニ来リテヨリ、師ニ至ッテ始メテ著ル。没スルニ及ンデ茶毘スルニ舌根ハ壞セズ。蓋シ所説ノ謬ラザルヲ表スト云ウ。贊シテ曰ク靈ハ母胎ヨリ発シ、妙慧ハ神ノ若シ 鉢ヲ持チテ旨ヲ悟リ、幼齡ニシテ經ヲ説ク 仏法東伝シテ 訛謬相イ承クルモ 実ニ師ノ至ルニ藉ッテ 大光明ヲ放ッ

〔補註〕

- (1) 鼓山湧泉寺福建省福州にあり、中国東南第一の禪刹。現在も寺運隆昌である。
- (2) 虚雲法師（一八四〇—一九五九）中国近代の名僧。法名は古巖、字は徳清、鼓山のほか、各地の名山に住した。寿百二十歳。虚雲については『中国仏教人名辞典』四〇八頁に詳しい。
- (3) 守一大師は守一空成という。守一についての伝記は未詳であるが、この『仏祖道影』以外に、『諸家宗派』一卷を光緒十六年に編集刊行している。
- (3) 楊仁山（文会）については『中国仏教史辞典』三九一頁に詳しい。

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華経（一）（若杉）

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華経(一)(若杉)

- (4) 慈山大師徳清(一五四六一六二三)については『中国仏教史辞典』二八九頁に詳しい。
- (5) 紫柏老人(達観真可)(一五四三一六〇三)については『中国仏教史辞典』一七八頁に詳しい。
- (6) 丁雲鵬、明代の人、字は南羽、聖華居士と号した。休寧の人。仏絵をよくし、明朝第一の絵師。万曆間、名は宇内を撼し、その絵を人々は争って求め、珍宝を視るようであったと伝えていいる。『中国仏学人名辞典』四頁に詳しい。
- (7) 牛首山は南京の南郊にある名山。山上に二つの峰があり、山容が牛が頭に似ていることから、このように名づけられたという。二つの峰には牛首山仏窟寺(現・普覺寺)と祖堂山幽棲寺とがある。
- (8) 「広諸祖道影疏」(『統蔵経』一・二・三十一の五・四三三・オーウ)
- (9) 『統蔵経』一・二・三十二の四・三三五ウ
- (10) 永覚老人元賢(一五七八一六七五)については『中国仏教史辞典』八九頁に詳しい。
- (11) 為霖道暉(一六一五一七〇二)については『中国仏教史辞典』二八四頁に詳しい。
- (12) 開元寺。唐の開元二十六年、敕命によって建てられた寺。
- (13) 『八十八祖道影伝賛』(『統蔵経』一・二・乙・二十の五・四六八オ以下)